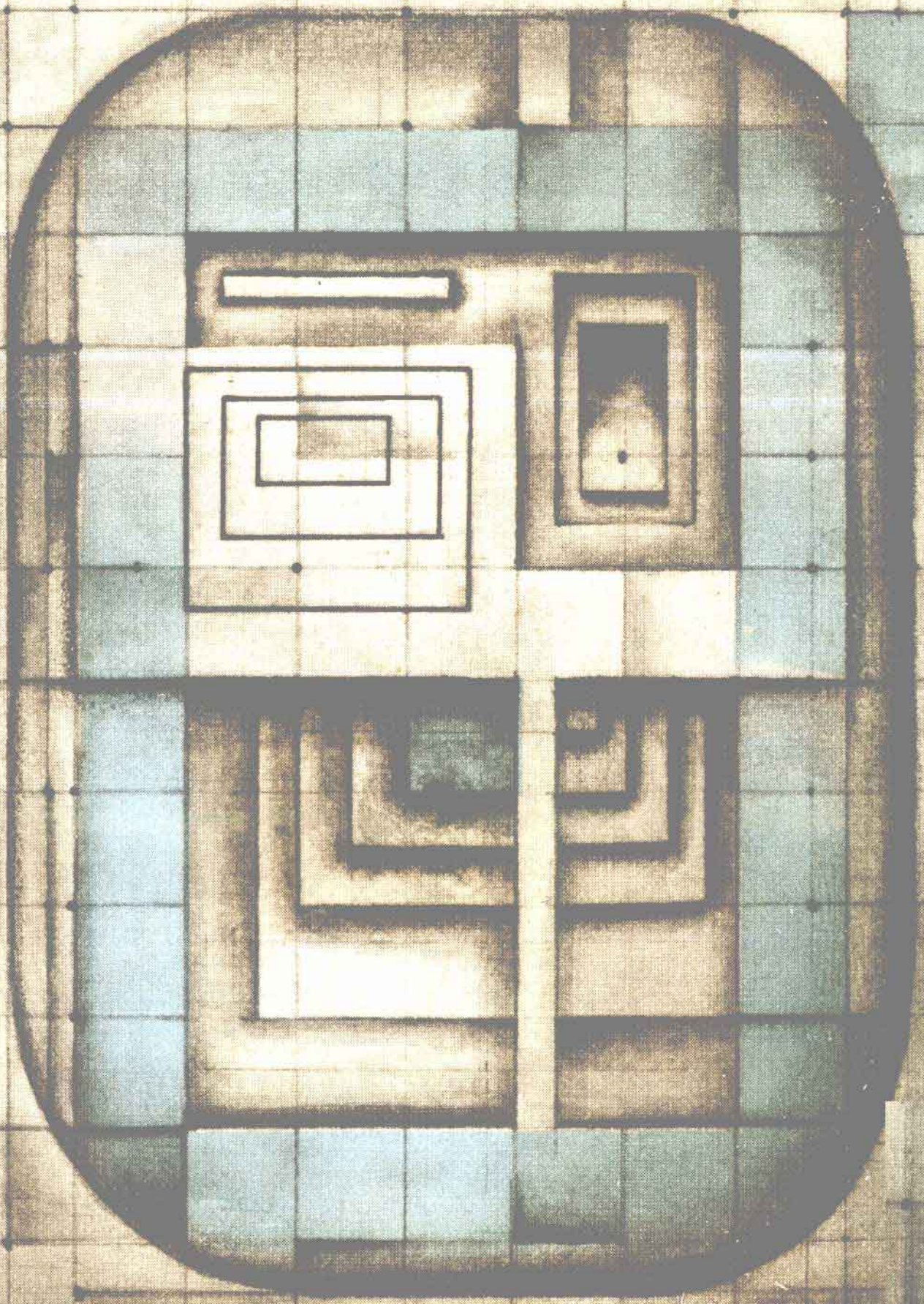
他人の顔

安部公房



新潮文庫

他

高校図書館用

新潮文庫 草121 A

昭和五十五年四月一日発行

著者 安部公房

発行者 佐藤亮一

発行所 株式会社 新潮社
郵便番号 一六二
東京都新宿区矢来町七一
電話 業務部(〇三)(二六六)五一一一
編集部(〇三)(二六六)五四二一
振替 東京四—八〇八番

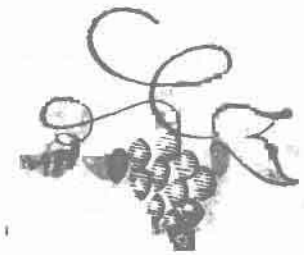
装幀 安部真知

印刷・株式会社金羊社　製本・加藤製本株式会社
© Kôbô Abe 1980　Printed in Japan
乱丁・落丁のものは本社にてお取替えいたします。

新潮文庫

他人の顔

安部公房著



新潮社版

他人の顔

试读结束：需要全本请在线购买： www.ertongbook.com

はるかな迷路のひだを通り抜けて、とうとうおまえがやって来た。「彼」から受け取った地図をたよりに、やっとこの隠れ家にたどりついた。たぶん、いくらか酔ったような足取りで、オルガンのペダルのような音をたてながら、階段を上りきった、とっつきの部屋。息をこらして、ノックをしてみたが、なぜか返事は返ってこなかった。かわりに一人の少女が、仔猫のように駈けよってきて、おまえのために、ドアを開けてくれるはず。伝言でもあるかと、声をかけてみるが、少女は答えず、薄笑いを残して逃げ去った。

おまえは、「彼」を求めて、のぞきこむ。しかし、「彼」はおろか、「彼」の影さえ、どこにも見当りはしないのだ、廃墟の臭いをただよわせている、死んだ部屋。表情を忘れた壁に見返されて、ぞっとする。後ろめたい思いで、引き返しかけたとき、テーブルの上の三冊のノートと、それに添えられた一通の手紙が目にとまり、やっとおまえも、罠にかけられたことに気づくのだ。いくら苦々しい思いが、こみ上げてきても、その思わせぶりの誘惑には、やはりうちかてまい。ふるえる手つきで、封を切り、今おまえはこの手紙を読みはじめている……

怒りもあるだろうし、屈辱もあるだろう、ともすれば用箋からはじき飛ばされそうになる視線を、じっとこらえて、どうかそのまま読みつづけてもらいたい。この瞬間をおまえが、無事くぐ

り抜けて、もう一歩こちらに歩み出してきてくれることを、ぼくがどんな思いで切望していることか。ぼくが「彼」に破れたのか、「彼」がぼくに破れたのか、ともかく仮面劇はこれで幕になったのだ。ぼくは「彼」を殺害し、犯人としてみずから名乗りをあげ、残さず一切を告白してしまおうと思っている。寛容からであろうと、その逆であろうと、とにかく読みつづけることにしてほしい。裁く権利がある者には、同時に、被告の陳述に耳傾ける義務もあるはずだ。

そうとも、こうして跪いているぼくを、そう簡単に見棄てたりしては、おまえまでがあらぬ共犯の嫌疑をかけられぬとも限らない。さあ、ゆっくり腰などおろして、くつろぐとしようよ。部屋の空気が悪ければ、すぐに窓を開けるがいい。必要ならば、台所には、急須もあれば湯呑もある。おまえが腰を落着けしだい、ここは迷路の果の隠れ家から、たちまち法廷へと早替りしてくれるのだ。おまえが調書しらべをしているあいだ、ぼくは仮面劇の終りを、さらにいっそう確かなものにするために、幕のほころびに継ぎでも当てながら、何時までででも待ちつづけることにする。「彼」の追憶だけでも、ここ当分、まず退屈の気遣いなどはなさそうだから。

――それでは、ここで、しばらくぼくの時間に遡ることにしよう。たぶん、おまえの今から三日前の、午前〇時。蜜をとかしたような雨まじりの風が、今夜もせがむようにして、窓を枠ごとゆさぶりつづけている。昼間は、汗ばむようでも、日が暮れると、つい火の気が恋しくなるほどだ。新聞によると、寒さ返りなのだそうだが、日が長くなったことは隠しようもなく、この雨があがれば、もうじき夏なのだろう。それを思うと気が気でない。ぼくの現状は、まさに蠟細工の

ようなもので、暑さに対してはからきし意気地がないのだ。照りつける太陽のことを思っただけでも、ぷつぷつ皮膚の表面が沸騰しはじめる。

そこでぼくは、夏がくるまえに、なんとかけりを付けてしまいたいものだと考えた。長期予報によれば、大陸の高気圧が張り出してきて、夏型の気象配置になるのは、ここ三、四日のうちらしい。つまり、三日以内に、おまえを迎える準備をととのえ終り、そっくりこの手紙の冒頭につなげることが出来れば、申し分ないわけだ。しかし三日は、決してじゅうぶんな日数とは言いがたい。なにぶん、問題の調書は、ごらんのとおり、大判のノート三冊にぎっしり書き込まれた、一年間にわたる記録なのである。それを一日一冊の割で、加筆し、削除し、訂正して、納得のいくものに仕上げねばならないとなると、これはなかなかの大仕事だ。気負い立ったぼくは、たっぷりニンニクをきかせた肉饅頭（にくまんじゅう）を夜食用に買いこんだりして、さっそく今日はいつもより二、三時間も早く戻ってきた。

だが、その結果は……いまいましいことに……ただ時間の絶対的不足を、あらためて思い知らされただけのことだった。じつは、ひと通り読み返してみて、そのあまりにも言いわけがましい調子に、われながらうんざりしてしまったのだ。ただでさえ滅（めい）入りがちな、この水びたしの夜ふけに、さらにしめっぽさが気になるというのだから、これはよくよくのことに違いない。幕切れが、かなり惨澹（さんたん）たるものであったことを、否定したりするつもりはないが、それでもぼくなりに、つねに目覚めているのだという確信だけは持ちつづけてきた。その確信もなしに、アリバイの裏付けになってくれるものやら、逆に有罪の証拠物件にされるものやらも分らない、こんなノ

ートを、飽きもせずに書きつづけてきたり出来るはずがあるまい。まったくの話、負け惜しみでもなんでもなく、ぼくは自分が追い込まれた迷路を、あくまでも論理上の受難だったのだと、いまだに固く信じ込んでいるのである。……しかし、予期に反して、ぼくのノートは、まるで閉じこめられた野良猫みたいに、いかにも哀れっぽい声で鳴きつづけていたのだ。いっそ、三日などという事にはこだわらずに、気がすむところまで、手を入れるべきなのだろうか。

いや、もう沢山だ。せっかく、一切を打ち明けてしまおうと、観念の臍をかためた矢先、噛み切れなかった肉の筋が、喉の途中に半分ひっかかったような気分は、これ以上もう真っ平である。悲鳴をあげているような部分は、いずれ末梢的なことなのだから、適宜、読みすごすようにしてもらえば、それですむことだ。たとえば、おまえは、電気ドリルと、ゴキブリと、板ガラスをこする音が、大の苦手だが、だからといって、まさかそれを人生の重大事などとは言い出しはすまい。電気ドリルは、歯医者の機械からの連想だろうと、おおよその見当はつけられるが、あとの二つについては、一種の心理的蕁麻疹だろうくらいしか言いようのない代物だ。蕁麻疹で命をとられたなどという話は、まだ聞いたこともない。

だが、もういい加減にして、きりをつけるとしよう。弁解についての、弁解を、いくら重ねてみたところで、どうにもなるものではない。そんなことより、大事なのは、現にいまおまえが、この手紙を読みつづけていてくれることなのだ。ぼくの時間が、そのままそっくり、おまえの現在に重なり合っていてくれることなのだ。そして、引きつづき、ノートの方にも、そのまま読みすすんでくれること……ぼくがおまえの時間に追いつく、最後のページまで、投げ出すことなく

読みすすんでくれること……

（いまおまえは、くつろいでくれているだろうか？　そうそう、煎茶は丈の低い緑色の罐の中だ。湯も、沸かしたてのやつを魔法瓶につめてあるから、そいつを使ってもらいたい。）

《黒いノート》

――ちなみに、ノートの順は、表紙の色で、黒、白、灰色となっている。色と内容とのあいだには、むろんなんの関係もない。ただ、区別しやすいようにと、行き当りばったりに選んでみたまでである。

まず、この隠れ家のことからでも、始めるとしようか。どこから始めようと、いずれ大差はないのだ。ただ、あの日のことなら、切り出しやすい。半月ほどまえ、ぼくが一週間の予定で、関西に出張することになった日のことである。退院して以来、はじめてのまとまった旅行だったし、たぶんおまえにも印象深い日だったと思うのだ。旅行の名目は、大阪のある印刷インク工場の工程管理の視察ということだったが、むろん口実で、実はあの日以来、このS荘にこもって、

试读结束：需要全本请在线购买： www.ertongbook.com

計画の最後の仕上げにかかりきりになっていたのである。

その日の日記をくってみると、次のように書いてある。

《五月二十六日。雨。新聞広告をたよりに、S荘をたずねてみる。私の顔を見て、前の中庭で遊んでいた子供が泣きだした。しかし、地理的条件もいいし、部屋の配置もほぼ理想的なので、ここに決める。新しい材木と塗装の臭いがひどく刺戟的だ。隣はまだ空室のままらしい。なんとか、疑われずに、隣の部屋も借りられるといいのだが……》

だがぼくは、S荘で、べつに変名もつかわなければ、身分を偽ろうともしなかった。無分別にみえるかもしれないが、自分なりの計算もあったのである。ぼくの顔は、いまさら小手先のごまかしくらいでは、どうなるものでもない。現に、玄関先で遊んでいた、そろそろ小学生だと思われる何処かの娘が、ぼくを一と目みるなり、夢のつづきでも見ているように泣きじゃくりはじめたほどだった。もっとも、肝心の管理人は、客商売のせいもあってか、馬鹿に愛想がよかったが……

いや、愛想がいいのは、なにも管理人ばかりとは限らない。残念なことには、ぼくと出会ったほとんどすべての人間が、愛想だけは惜し気もなく支払ってくれた。こちらが、ある地点から深入りしようとしないかぎり、誰もがすこぶる気前のいい払いっぷりをみせてくれた。無理もない。ぼくの顔をまともに見まいとすれば、せめて愛想くらいはよくせずにいられまい。おかげでぼくも、無用の穿鑿は避けられるというものだ。愛想の壁でさえぎられて、ぼくはいつも、完全

に孤独だった。

S荘は、新築して間もないせいか、十八ばかりある部屋の、半数ちかくがまだ空室のままだった。管理人は、頼みもしないのに、万事飲込み顔で、二階のいちばん奥まった、非常階段の隣の部屋を選んでくれた。つまり、そんなふうだったのである。もっとも、その部屋は、たしかにわざわざ選んでくれただけの値打ちはあった。浴室はむろんのこと、上等ではないが、机に二脚の椅子が備えつけになっていたし、それに、ほかの部屋にはない、テラス風の出窓までがついていた。おまけに、非常階段の下が、四、五台分の駐車場になっていて、そこから直接、横の路地に出られるように出来ている。むろん、それ相応に値も張っていた。しかし、ある程度の投資は、はじめから覚悟の上のことだったので、すぐにその場で、三ヵ月分の敷金を払込んだ。ついでに、近くのふとん屋から、夜具を一式、とどけさせることにする。管理人は、ますますうれしさを隠しきれないとでもいうように、通風の加減や、日当りの具合などについて、際限もなく喋りつづけた。そのうち、話題がつきようものなら、身の上話でもはじめかねない勢いだった。が、運よく、差出しかけた部屋の鍵を、私の手にとどくまえにはなしてしまったので、鍵は鋭い音をたてて床にころがった。管理人は、やり場のない表情で、あわててガスの元栓の封印を引きちぎると、そそくさと退場してしまってくれた。やれやれである……こんなふうに、嘘の上塗りがいつも剝げやすいものだったら、どんなにか気楽なことだろうに……

すでに、顔のまえにひろげた手の指が、数えられないほどの暗さになっていた。まだ、人間を住まわせた経験のない、その部屋は、いかにもよそよそしくて無愛想だ。しかし、愛想のいい人間などよりは、このほうがまだずっとましである。それに私は、例の事件以来、暗闇というものに、ひどく親近感を覚えはじめていた。まったくの話、この世のすべての人間が、一瞬にして眼球を失うか、光の存在を忘れてしまうかしてくれたら、どんなにか素晴しいことだろう。たちまち、あらゆる「形」に、和解が成立する。三角パンも、丸パンも、要するにパンはパンなのだということを、万人が納得する。……そういえば、さっきの小娘だって、目をつぶったまま、ぼくの声だけを聞いていればよかったのだ。そうすれば、ぼくたちは一緒に遊園地に出掛け、並んでアイスクリームを食べあうような仲にだってなれていたかもしれないのに……なまじ光があったばかりに、彼女は三角パンを、パンではなくて三角だと思い違えてしまった。光というやつは、自身透明であっても、照らしだす対象物を、ことごとく不透明に変えてしまうものらしいのだ。

しかし、現に光がある以上、闇はせいぜい期限つきの執行猶予にしかすぎない。窓を開けると、雨まじりの風が、黒い蒸気のように吹込んできた。思わず、咳込み、サングラスを外して、涙をぬぐうと、通りをへだてた商店街の、電線や、電柱の頭や、並んだ軒の縁などが、往き交う車のライトを受けて、拭き残した黒板のチョークの跡のように淡く光っていた。

廊下を近づく足音がした。習慣になった動作で、眼鏡をかけなおす。ふとん屋が、管理人を通じてたのんでおいた、寝具一式を、届けに来たのだった。代金をドアの下から押しやって、ふとんは廊下に置いたままで、引取ってもらった。

これでなんとか、スタートの用意はととのったようである。上衣をぬいで、洋服箪笥を開けると、扉の裏に、鏡がはめこんであった。もう一度、眼鏡をはずし、マスクをとり、鏡をのぞきこみながら、顔の繃帯を解きはじめる。三重にまかれた繃帯は、ぼってり汗を吸込んで、朝まいたときの二倍の重さに感じられた。

やがて、解き終えたところから、わがもの顔に這い出してくる、蛭の塊り……からみ合い、赤黒くふくれ上った、ケロイドの蛭……まったく、なんという醜悪さだ！　ほとんど……日課にして繰返していることなのだから、もうそろそろ馴れてくれてもいいように思うのだが……

そのことさらしい驚きに、いっそう、むしゃくしゃさせられるのだ。考えてみれば、なんの根拠もない、非合理な感性である。たかだか、人間の容器、それもほんの一部分にすぎない顔の皮膚くらいに、なんだってそんな大騒ぎをしなければならないのか。むろん、そうした偏見や、固定観念は、べつに珍らしいものでもなんでもない。たとえば、まじないの信仰……人種的偏見……蛇に対するいわれのない恐怖（あるいは、さっき手紙でも触れた、ゴキブリ恐怖症）。……だからといって、憧れに生きているニキビ面の青二才ならともかく、れっきとした研究所の一部門をあずけられ、船の錨くらいの重さでは、しっかり世間に結びつけられているはずのぼくが、いまさらそんな、心理的蕁麻疹に悩まされたりするようでは困るのだ。蛭の巣に対する、直接の嫌悪以上には、べつだん理由がないと知りながら、それでも苦悩を断ち切れずにいる自分が、なんともやりきれなかったのである。

むろん、自分なりに、一応の努力はしてみたつもりである。いたずらに、避けて通るよりは、

むしろ事態を直視して、それに馴れてしまうのが一番だろう。こちらが、なんとも思わなくなれば、相手もこだわるのをよすにちがいない。そう思ってぼくは、研究所でも、すすんで自分の顔を話題にするようにしたものだ。たとえば、自分を、テレビの漫画に出てくる、覆面の怪人になぞらえて、わざと大げさにからかってみたりする。向うからはこちらの表情を見られずに、覗(のぞ)く一方という便利さを、わざと誇張して面白がってみせたりする。まず、他人に馴れてもらうことが、自分を馴らすなによりの早道にちがいない。

そして、それなりの効果はあったようだ。やがて、研究室のなかでは、さほどぎごちなさは感じずにすませられるようになっていた。覆面の怪人も、単なる虚勢ではなくなり、連中がテレビや漫画本に、飽きられもせずに繰返し登場してくるのには、ちゃんとそれなりの根拠があるような気さえしはじめていたほどだ。たしかに、覆面には――下に蛭どもが巣くっているという現実さえなかったら――ある居心地のよさがあったこともまた事実である。肉体を、衣服で覆ったのが文明の進歩なら、将来、覆面が常識になることだって、ないという保証はどこにもない。これまでにだって、重要な儀式や祭などの場合には、しばしば実際に使用されているのだ。うまく言いあらわすことは出来ないが、覆面は他人との関係を、素顔のとき以上に普遍的なものに高めてくれるのではあるまいか……

徐々にではあったが、快癒(かいゆ)に向っているのだと、信じかけている時もないではなかった。だが私は、顔の恐ろしさを、まだ本当には知っていなかったのである。そうした間にも、繃帯の下では、蛭の侵蝕がちゃくちゃくと進行しつづけていたのだ。液体空気による凍傷などは、火傷(やけど)ほ

どには影響が深くなく、したがって恢復も早いはずだという、医者の保証にもかかわらず……テラシンの内服、コーチゾンの注射、放射線の照射と、手をかえ品をかえした、何重もの防禦陣をのりこえて……蛭の軍勢は、つぎからつぎへと、新手の兵をくりだし、ぼくの顔の奥深く占領区域をひろげて行っていたのである。

たとえば、ある日のこと……ちょうどぼくが、同僚たちと、他の部署との連絡会議を終えて引返してきた昼休み……今年学校を出たばかりの、若い女の助手が、いわくありげな表情で、なにかの本のページをくりながら近づいて来た。

――ほら、先生、すごく面白い絵。笑いを含んだ、細い指の下にあるのは、《偽りの顔》と題した、クレーの、ペン描きのデッサンだった。その顔は、幾本かの平行線で水平に仕切られていて、見方によっては、繃帯でぐるぐる巻きにしたようにも見えなくはない。眼と、口のところだけが、わずかに狭い割目になっていて、無表情の表情が、残酷なまでに強調されていた。いきなりぼくは、言いようのない屈辱感におそわれた。むろん、彼女に、悪意があろうはずがない。しかも、彼女に、そんな気を起こさせたのは、もとはと言えば、ぼくの意識的な誘導のせいだったのだし……そうとも、落着くんだ！　ここで腹を立てたりしては、せっかくの苦心が水の泡じゃないか！　……そう言いきかせながらも、ついに我慢しとおすことが出来ず、やがてぼくには、その絵が、まるで彼女の眼にうつった、ぼく自身の顔のようにさえ見えてくる……。見られるばかりで、見返すことの出来ない、偽りの顔……そんなふうに、彼女から見られていたのだと思うのは、やはりなんとも、やりきれないことだった。

试读结束：需要全本请在线购买： www.ertongbook.com